

「岡谷シルク」のブランド化にあたり岡谷蚕糸博物館の高林館長に、  
未来に伝えたい岡谷のシルク資産についてお聞きしました。

〈特集〉

# 新しいシルクのまち、はじまる。

## 未来に伝えたい 岡谷のシルク資産

### 岡谷ならではのシルク資産

「岡谷でしかできないもの」「岡谷を感じるもの」「岡谷として誇りのあるもの」が、岡谷としてのブランドだと考えています。

そのブランドの元になる岡谷ならではのシルク資産は、まず世界一の糸都としての歴史です。岡谷の先人たちは叡智と努力によって、地域の特性を活かした製糸業の繁栄を築きましたが、それは岡谷だからこそできたことなのです。

子どもたちの「お蚕学習」も岡谷ならではのもの。郷土に誇りと愛着を持って世界へ羽ばたいてもいいですね。

また、蚕糸博物館は、歴史に関する展示と、宮坂製糸所の動態展示によって立体的に製糸を理解できる博物館として、日本、さらに世界でも類がないものだと思います。

### 「オール岡谷産シルク」

いままぜ、みんなで「オール岡谷産シルク」に取り組んでいるかという点、養蚕から製品までつなげるということは岡谷でしかできないことだからです。

「シルク岡谷」と「ものづくり」という地盤がある岡谷で、「オール岡谷産シルク」を実現することには、大きな意義がある。

岡谷には「シルク岡谷」ものづくりといった、ほかでまねできない地盤ができています。その地で「オール岡谷産シルク」を実現することには大きな意義があるのです。

養蚕は知識・技術・根気が必要な、大変「ずく」のいる、農業の集大成のような産業です。三沢区民農園では養蚕が本格的にスタートし、蚕糸博物館でも担い手育成を進めています。今後は養蚕、製糸、製品化に関わる人や団体などの協力体制で、岡谷でしかできない「オール岡谷産シルク」を生み出したい。そして、シルク資産を活かしながら、ほかではできないことをやっていきたいと思います。



岡谷蚕糸博物館 館長 高林千幸

三沢区民農園の桑園(そうえん)

## 「オール岡谷産シルク」の3要素

### 製品化

宮坂製糸所の生糸を使い、岡谷絹工房で製品化を進める。



### 製糸

蚕糸博物館に併設された宮坂製糸所で、岡谷産の繭から糸をとる。



### 養蚕

三沢区民農園で桑園の管理、カイコの飼育を行い、繭を宮坂製糸所に納める。



## 市

内で行われなくなっていた養蚕を復活し、岡谷の歴史・伝統を継いでいくと三沢区民農園のみなさんが立ち上がりました。

この6月には新たな蚕室(カイコを飼育する建物)が完成。岡谷産の繭づくりが本格スタートし、「オール岡谷産シルク」の3つの要素(養蚕・製糸・製品化)が揃いました。

市のブランド推進室では、岡谷のシルク資産を軸に、文化、ものづくりなどさまざまな魅力を活かすまちづくりによって「岡谷シルク」のブランド化を進めています。岡谷で育ったカイコの繭から糸をとり、市内で製品化する「オール岡谷産シルク」は、この要となります。

今月は、新しいシルク文化の創造についてお伝えします。

### シルクを取り巻く状況

現在、国内で流通するシルクのほとんどは外国産で、国産繭を原料とする純国産シルクは1%ほど。国内の養蚕農家、製糸工場も昭和初期の全盛期に比べ激減しています。

純国産シルクの生産体制を守り、次世代に伝える取り組みが各地で行われていて、収益化・差別化も課題となっています。

### シルク資産2

## 新しいお蚕学習

### シルクおかや次世代担い手育成プログラム

従来の市内小中学校でのお蚕学習に加え、昨年度スタートしたプログラムです。対象は小学4年生から大学生・一般。若い世代などに養蚕、製糸、絹製品づくりを体験してもらい、岡谷のシルク文化、養蚕などを担い、魅力を発信する人材を育てることを目的としています。

昨年度に行った入門編ではカイコや製糸、絹の文化を学び、草木染めを体験しました。

今年度は基礎編で、三沢区民農園での養蚕などを通して実践的に学ぶ予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止。来年度、改めて開講する予定です。

(岡谷蚕糸博物館・高林館長)



昨年度の次世代担い手育成プログラム(桑の葉で染色)

高林館長や、地域おこし協力隊の橋口さんなど、いろいろな人にアドバイスをもらっています。養蚕の道具をいただいたり、

### さまざまな協力を得て養蚕を復活

三沢区には片倉兼太郎の生家があり、過去に養蚕をやっていた家も多い。そういった「シルク岡谷」の財産を残したかったし、まちの活性化のためでもあります。

### 「三沢区で養蚕を」という想い



山之内さん(左)と片倉さん(右)

### 新しい蚕室の完成と今後の展望

新蚕室にはカイコを育てやすい工夫を施しました。今年は昨年の6倍となる春秋あわせて12万頭を飼育する予定。今後、桑園を拡大し、担い手も増やして、よりいっそうの増産をめざします。良い繭をつくって喜んでもらえるようにしたいし、その繭を岡谷の「売り」になるようなものに活用してほしい。

また、区民以外でも見学や手伝いをしてもらえるようにできればと思っています。とくに子どもたちや若者には養蚕の魅力を知ってもらいたいですね。

- ① 桑の枝を運び込む。桑を与えるのは1日2〜3回。
- ② 大工でもある片倉さんを中心に区民農園のみなさんの協力を得て建てた蚕室は、消毒しやすい構造になっている。水の使用頻度も多いので防水や水はけも考慮した。
- ③ 上簇(下記参照)は区民農園の婦人部など大勢で手伝う。婦人部では真綿や桑の美ジャムもつくっている。
- ④ 一つひとつ手で確かめて出荷できない繭を取り除く。



養蚕をやりたい人を募集しています。 問合せ：事務局 ☎090-4968-0971

### えいけん宮繭

「回転簇」は、上方が重くなると回転し、カイコがなるべく均等に入るようになっています。柀目に入ったカイコは口から糸を出し、繭をつくります。上簇から7〜10日後くらいに、簇から繭を外して出荷します。



### しょうぞく上簇

カイコに繭をつくる兆候が現れたら、桑を取り除きカイコだけを集めます。縦置きにした簇(まぶし)という柀目(ますめ)状の枠の下にカイコを置くと昇っていき、柀目に入ります。上に昇るというカイコの習性を利用する作業です。



三沢区民農園のみなさん(前列右端：橋口さん)



### シルク資産1

# 片倉の地で養蚕復活

## 養蚕 [Sericulture]

### 約

30年前に市内で養蚕が行われなくなりました。そこで10年前、養蚕を復活させようと、三沢区民農園※1で試験的に養蚕を開始。試行錯誤をしながらの挑戦でした。桑園、仮の蚕室を整備し、平成28年からは宮坂製糸所に繭を納品しています。

そして、ついにこの6月、新たな蚕室が完成し、養蚕が本格始動。中心になって活動している、三沢区民農園の立ち上げに関わった山之内寛さんと、(二財)大日本蚕糸会※2の新規就農支援制度を利用して養蚕を学んだ片倉仁さんのお二人に話をうかがいました。

- ※1 三沢区民農園：平成20年発足。区内の遊休農地の活用や子どもたちに農業の楽しさを伝える活動などを行う。
- ※2 大日本蚕糸会：蚕糸業の振興・助成を行うとともに、蚕糸絹に関する応用研究や実用化研究を行う一般財団法人。



カイコのように見ながら回転簇(まぶし)を吊す。

カイコの病気を防ぐため、常に周りは清潔にしています。

良い繭ができる要件は、環境の良い蚕室と良い桑!

地域おこし協力隊・橋口が解説します!

### しょうさく除沙

桑の食べ残しやフンを取り除く作業が「除沙」です。蚕座(さんざ)カイコを飼育している場所の上に網を敷いて桑を置くと、カイコが網目から上に昇ってきます。網ごとカイコを移動させ掃除します。



### 地域おこし協力隊 橋口とも子

脱皮して大きくなる  
カイコは4回の脱皮を繰り返します。春蚕(はるご)の場合、カイコの赤ちゃんを蚕室で育てはじめて約20日で繭をつくり出します。



2008年から東京農工大学で約10年間、養蚕を学ぶ。昨年度より岡谷市の地域おこし協力隊員として活躍している。

### 養蚕の流れ

「銀河シルク」や「トルネードシルク」などの生糸

# シルク資産3 宮坂製糸所

製糸  
[Silk Reeling]

宮坂製糸所 代表取締役  
高橋耕一さん



**現** 在、国内の製糸工場は4つ。宮坂製糸所は、そのなかで唯一、伝統的な手作業での繰糸を行っている工場、最新の自動繰糸機も使用して多種多様な生糸を生産しています。

**ほかにはないオリジナルの生糸を開発**

当社では、新たに特徴的な生糸を開発提案しています。世界一太い生糸「銀河シルク」は、空気を含ま柔らかく、シャリ感があります。また、節があり独特の風合いの「トルネードシルク」は、従来の手法では繰糸困難な繭でも使えるので、原料繭を無駄なく利用することができ、原料繭でも織ってもらっています。

**岡谷産の繭への期待**

かつて岡谷は製糸業で栄えましたが、いまも製糸だけでなく養蚕や織りなど、シルクに関するさまざまな技術・文化が残っています。大量生産は難しくても、そのような資産をみんなに残し、活用していくことが大切だと思っています。



三沢区民農園の繭は、諏訪式繰糸機(写真上)や自動繰糸機(写真下)で繰ります。

## 新しいシルク文化を紡ぐ

地域おこし協力隊・佐々木千玲さんに「岡谷シルク」のブランディングについてお聞きしました。

**ブランディングとは**

商品を作って商標を取ったり、ロゴマークを作ったり、広告を出したり...ということとをブランディングだと思っている方が多いと思います。実はこれらはブランディングの手段のひとつであって、根本の目的とは少し違います。

まずは、そのブランドが提供する価値をみきわめて、その魅力をお客さまの心に満足が残るようなものとして伝えていく

ことを目的としていく必要があります。

**シルクの価値が見直されるとき**

「岡谷シルク」の場合は、シルクをめぐる歴史、文化、教育、ものづくりといった岡谷のみなさんの誇りそのものが核となると思います。この核を大切にしたいと思っています。その魅力をいまの時代にあった切り口で伝えていく。コロナ後の世界がどうなるかはだれにも予測がつきませんが、生きるために本当に大切な「こころ」や「もの」の価値が改めて見直されるという気がしています。それは教育や体によいもの、環境を考慮したものなどでしょう。天然繊維のシルクはまさにそこに当てはまります。蚕糸博物館主導で行っているお蚕学習も他にはない試みだと思っています。

**シルクを軸にした岡谷ならではの魅力**

この1年、岡谷で学んだことを、ひとつのブランドストーリーとして作っていく

# シルク資産4 岡谷絹工房

製品化  
[Production]



大正期のモダンな建築のなかで美しいシルク製品が映える。昨年は「アトリエOPEN DAY」を初めて開催。

**宮** 坂製糸所の生糸を使った手織り、手染めによる絹製品の開発と後継者育成の役割を担う岡谷絹工房。技術力・表現力には定評があります。

**歴史文化財で活動する工房**

岡谷絹工房がある建物は、国登録有形文化財、近代化産業遺産に登録・認定されている旧山一林組製糸事務所（大正10年建築）。歴史文化財のなかで機を並べて織っている工房はめずらしく、価値ある場所です。

**国内のファッションブランドも注目**

この場所と、織り手の技術力に惹かれてファッションブランドやデザイナーから制作依頼が来ます。また、染織の技術を伝えるため、毎年、新規の研修生を受け入れ、後継者育成にも力を入れています。

**技術と場所を活かした商品化をめざして**

この技術力を活かし、「オール岡谷産シルク」の製品化にも携わっていきます。また、昨年、銀座NAGANOのイベントで好評だったワークショップも「商品」としてこの場所で実施していく予定です。



岡谷シルクに想いのある女性たちを中心に運営。後継者育成も行っています。

ことが今年のわたしの仕事です。その先にブランドの顔となる商品が生まれると思っています。手に取れるシルク製品だけではなく、シルクを軸に、岡谷市の持つさまざまな資産（自然、文化、食、ものづくり）を組み合わせることで、岡谷ならではの体験価値を提供できる滞在型プログラムも魅力的な商品になるのではと思っています。



岡谷絹工房代表  
小山町子さん

地域おこし協力隊  
佐々木千玲

岡谷蚕糸博物館 館長  
高林千幸

## SNSで情報発信



「いいね!」 「フォロー」 「シェア」  
をお願いします!



シルクファクトおかや

シルクファクトおかやの最新情報やお蚕さん、シルクに関わる「なるほど情報」を発信しています。



糸都(しと) 岡谷のシルクに関する取り組みやイベント、地域おこし協力隊の活動など幅広く情報発信しています。三沢区民農園の養蚕情報もご覧いただけます。

わたしたちが書いています!



ブランド推進室統括主幹 滝沢 修 (シルクファクト Twitter担当)  
ブランド推進室主査 両角 太郎 (シルクファクト Facebook担当)



地域おこし協力隊 佐々木千玲 (岡谷シルクFacebook・Instagram シルクファクトInstagram担当)



→SNSアカウントは29ページをご覧ください。

問合せ●ブランド推進室(内線1930)

### シルク資産2

## 新しいお蚕学習

### シルクおかや次世代担い手育成プログラム

従来の市内小中学校でのお蚕学習に加え、昨年度スタートしたプログラムです。対象は小学4年生から大学生・一般。若い世代などに養蚕、製糸、絹製品づくりを体験してもらい、岡谷のシルク文化、養蚕などを担い、魅力を発信する人材を育てることを目的としています。

昨年度に行った入門編ではカイコや製糸、絹の文化を学び、草木染めを体験しました。

今年度は基礎編で、三沢区民農園での養蚕などを通して実践的に学ぶ予定でしたが、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で中止。来年度、改めて開講する予定です。

(岡谷蚕糸博物館・高林館長)



昨年度の次世代担い手育成プログラム(桑の葉で染色)

高林館長や、地域おこし協力隊の橋口さんなど、いろいろな人にアドバイスをもらっています。養蚕の道具をいただいたり、

### さまざまな協力を得て養蚕を復活

三沢区には片倉兼太郎の生家があり、過去に養蚕をやっていた家も多い。そういった「シルク岡谷」の財産を残したかったし、まちの活性化のためでもあります。

### 「三沢区で養蚕を」という想い



山之内さん(左)と片倉さん(右)

### 新しい蚕室の完成と今後の展望

新蚕室にはカイコを育てやすい工夫を施しました。今年は昨年の6倍となる春秋あわせて12万頭を飼育する予定。今後、桑園を拡大し、担い手も増やして、よりいっそうの増産をめざします。良い繭をつくって喜んでもらえるようにしたいし、その繭を岡谷の「売り」になるようなものに活用してほしい。

また、区民以外でも見学や手伝いをしてもらえるようにできればと思っています。とくに子どもたちや若者には養蚕の魅力を知ってもらいたいですね。

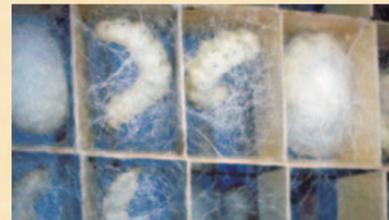
- ① 桑の枝を運び込む。桑を与えるのは1日2～3回。
- ② 大工でもある片倉さんを中心に区民農園のみなさんの協力を得て建てた蚕室は、消毒しやすい構造になっている。水の使用頻度も多いので防水や水はけも考慮した。
- ③ 上簇(下記参照)は区民農園の婦人部など大勢で手伝う。婦人部では真綿や桑の美ジャムもつくっている。
- ④ 一つひとつ手で確かめて出荷できない繭を取り除く。



養蚕をやりたい人を募集しています。 問合せ：事務局 ☎090-4968-0971

### えいけん 宮繭

「回転簇」は、上方が重くなると回転し、カイコがなるべく均等に入るようになっています。柀目に入ったカイコは口から糸を出し、繭をつくります。上簇から7～10日後くらいに、簇から繭を外して出荷します。



### しょうぞく 上簇

カイコに繭をつくる兆候が現れたら、桑を取り除きカイコだけを集めます。縦置きにした簇(まぶし)という柀目(ますめ)状の柀の下にカイコを置くと昇っていき、柀目に入ります。上に昇るといったカイコの習性を利用する作業です。



### シルク資産1

# 片倉の地で養蚕復活

約 30年前に市内で養蚕が行われなくなりました。そこで10年前、養蚕を復活させようと、三沢区民農園※1で試験的に養蚕を開始。試行錯誤をしながらの挑戦でした。桑園、仮の蚕室を整備し、平成28年からは宮坂製糸所に繭を納品しています。

そして、ついにこの6月、新たな蚕室が完成し、養蚕が本格始動。中心になって活動している、三沢区民農園の立ち上げに関わった山之内寛さんと、(二財)大日本蚕糸会※2の新規就農支援制度を利用して養蚕を学んだ片倉仁さんのお二人に話をうかがいました。

- ※1 三沢区民農園…平成20年発足。区内の遊休農地の活用や子どもたちに農業の楽しさを伝える活動などを行う。
- ※2 大日本蚕糸会…蚕糸業の振興・助成を行うとともに、蚕糸絹に関する応用研究や実用化研究を行う一般財団法人。



カイコのように見ながら回転簇(まぶし)を吊す。

カイコの病気を防ぐため、常に周りは清潔にしています。

良い繭ができる要件は、環境の良い蚕室と良い桑!

地域おこし協力隊・橋口が解説します!

### しょうさき 除沙

桑の食べ残しやフンを取り除く作業が「除沙」です。蚕座(さんざ)カイコを飼育している場所の上に網を敷いて桑を置くと、カイコが網目から上に昇ってきます。網ごとカイコを移動させ掃除します。



地域おこし協力隊 橋口とも子

### 脱皮して大きくなる

カイコは4回の脱皮を繰り返します。春蚕(はるご)の場合、カイコの赤ちゃんを蚕室で育てはじめて約20日で繭をつくり出します。



2008年から東京農工大学で約10年間、養蚕を学ぶ。昨年度より岡谷市の地域おこし協力隊員として活躍している。

### 養蚕の流れ

「銀河シルク」や「トルネードシルク」などの生糸

# シルク資産3 宮坂製糸所

製糸  
[Silk Reeling]

宮坂製糸所 代表取締役  
高橋耕一さん



**現** 在、国内の製糸工場は4つ。宮坂製糸所は、そのなかで唯一、伝統的な手作業での繰糸を行っている工場、最新の自動繰糸機も使用して多種多様な生糸を生産しています。

**ほかにはないオリジナルの生糸を開発**

当社では、新たに特徴的な生糸を開発提案しています。世界一太い生糸「銀河シルク」は、空気を含ま柔らかく、シャリ感があります。また、節があり独特の風合いの「トルネードシルク」は、従来の手法では繰糸困難な繭でも使えるので、原料繭を無駄なく利用することができ、原料繭でも織ってもらっています。

**岡谷産の繭への期待**

かつて岡谷は製糸業で栄えましたが、いまも製糸だけでなく養蚕や織りなど、シルクに関するさまざまな技術・文化が残っています。大量生産は難しくても、そのような資産をみんなに残し、活用していくことが大切だと思っています。



三沢区民農園の繭は、諏訪式繰糸機(写真上)や自動繰糸機(写真下)で繰ります。

## 新しいシルク文化を紡ぐ

地域おこし協力隊・佐々木千玲さんに「岡谷シルク」のブランディングについてお聞きしました。

**ブランディングとは**

商品を作って商標を取ったり、ロゴマークを作ったり、広告を出したり...ということとをブランディングだと思っている方が多いと思います。実はこれらはブランディングの手段のひとつであって、根本の目的とは少し違います。

まずは、そのブランドが提供する価値をみきわめて、その魅力をお客さまの心に満足が残るようなものとして伝えていく

ことを目的としていく必要があります。

**シルクの価値が見直されるとき**

「岡谷シルク」の場合は、シルクをめぐる歴史、文化、教育、ものづくりといった岡谷のみなさんの誇りそのものが核となると思います。この核を大切にしたいと思っています。その魅力をいまの時代にあった切り口で伝えていく。コロナ後の世界がどうなるかはだれにも予測がつきませんが、生きるために本当に大切な「こころ」や「もの」の価値が改めて見直されるという気がしています。それは教育や体によいもの、環境を考慮したものなどでしょう。天然繊維のシルクはまさにそこに当てはまります。蚕糸博物館主導で行っているお蚕学習も他にはない試みだと思っています。

**シルクを軸にした岡谷ならではの魅力**

この1年、岡谷で学んだことを、ひとつのブランドストーリーとして作っていく

### SNSで情報発信



「いいね!」〈フォロー〉〈シェア〉  
をお願いします!



シルクファクトおかや

シルクファクトおかやの最新情報やお蚕さん、シルクに関わる“なるほど情報”を発信しています。



糸都(しと)岡谷のシルクに関する取り組みやイベント、地域おこし協力隊の活動など幅広く情報発信しています。三沢区民農園の養蚕情報もご覧いただけます。

わたしたちが書いています!



ブランド推進室統括主幹  
滝沢 修  
(シルクファクト Twitter担当)



ブランド推進室主査  
両角 太郎  
(シルクファクト Facebook担当)



地域おこし協力隊  
佐々木千玲  
(岡谷シルクFacebook・Instagram  
シルクファクトInstagram担当)



→SNSアカウントは  
29ページをご覧ください。

問合せ●ブランド推進室(内線1930)



ことが今年のわたしの仕事です。その先にブランドの顔となる商品が生まれると思っています。手に取れるシルク製品だけではなく、シルクを軸に、岡谷市の持つさまざまな資産(自然、文化、食、ものづくり)を組み合わせることで、岡谷ならではの体験価値を提供できる滞在型プログラムも魅力的な商品になるのではと思っています。



岡谷絹工房代表  
小山町子さん

地域おこし協力隊  
佐々木千玲

岡谷蚕糸博物館 館長  
高林千幸

# シルク資産4 岡谷絹工房

製品化  
[Production]



大正期のモダンな建築のなかで美しいシルク製品が映える。昨年は「アトリエOPEN DAY」を初めて開催。

**宮** 坂製糸所の生糸を使った手織り、手染めによる絹製品の開発と後継者育成の役割を担う岡谷絹工房。技術力・表現力には定評があります。

**歴史文化財で活動する工房**

岡谷絹工房がある建物は、国登録有形文化財、近代化産業遺産に登録・認定されている旧山一林組製糸事務所(大正10年建築)。歴史文化財のなかで機を並べて織っている工房はめずらしく、価値ある場所です。

**国内のファッションブランドも注目**

この場所と、織り手の技術力に惹かれてファッションブランドやデザイナーから制作依頼が来ます。また、染織の技術を伝えるため、毎年、新規の研修生を受け入れ、後継者育成にも力を入れています。

**技術と場所を活かした商品化をめざして**

この技術力を活かし、「オール岡谷産シルク」の製品化にも携わっていきます。また、昨年、銀座NAGANOのイベントで好評だったワークショップも「商品」としてこの場所で実施していく予定です。



岡谷シルクに想いのある女性たちを中心に運営。後継者育成も行っています。